

資料 1 伊豆の国市の歴史概要—重層する文化財の時代と区域—

人の定着から伊豆の国形成への足跡 〈旧石器～平安時代〉

ア 旧石器・縄文・弥生時代

静岡県東部の愛鷹山南麓（沼津市・長泉町）や箱根山西南麓（三島市）は、旧石器・縄文時代の遺跡が集中する地域として全国的に知られている。伊豆の国市東部は、箱根山に連なる多賀山地西麓の丘陵地帯が占めており、旧菰山町（以下菰山地区）や旧大仁町（以下大仁地区）で旧石器・縄文時代の遺跡が多く分布している。

旧石器時代の遺跡は、大仁地区の笹子遺跡、旧伊豆長岡町（以下伊豆長岡地区）の湯ヶ洞山遺跡がある。湯ヶ洞山遺跡では、ナイフ形石器・搔器・石核などが多数発見され、笹子遺跡では、いくつかの「ブロック」と呼ばれる集中箇所を形成していることが注目されている。旧石器時代の人々は、小集団で狩猟をしながら移動生活をおくっていた。

縄文時代になると、草創期～早期に次第に定住化の傾向がみられ、前期～中期に定住のムラをつくるようになる。大仁地区の浮橋・長者原などの丘陵部や狩野川段丘上の田京・三福一帯は、縄文時代の集落が多く、伊豆半島における中心地のひとつに位置づけられ、三福の仲道A遺跡の草創期縄文土器（県指定有形文化財）や公蔵免遺跡の出土遺物等、貴重な遺物が出土している。

弥生時代になると、人々は水田耕作に適する低地部に居住地を移すようになり、菰山地区や伊豆長岡地区などに多くの遺跡が見られる。伊豆の国市の弥生時代遺跡は、江間地域の八ツ島遺跡、東部山間地域の奈古谷低地遺跡や神崎遺跡など、水田遺構が多く発見されていることで知られ、菰山地区の山木遺跡は、弥生時代の拠点集落遺跡として、静岡市の登呂遺跡と並び称される遺跡である。おそらくこの時期の集落は丘陵の縁辺部や自然堤防上に存在したと思われる。この頃になると集落・集団格差が生まれ、有力集団の中でも階層の分化が進み、やがてそれらの中心指導者が、豪族や首長へと成長していったのであろう。

また、人々の暮らしにとって水は必要不可欠なものであり、原始・古代の遺跡の多くは、狩野川もしくはその支流を中心に分布している。さらに弥生時代、水田耕作が行われるようになると、生業の面からもさらにその重要性は増すこととなった。



仲道A遺跡出土縄文土器



山木遺跡の生産・生活用具

イ 古墳・奈良・平安時代

豪族・支配者層の出現とともに、伊豆の国市内でも5世紀から7世紀にかけて丘陵部や台地の先端部に前方後円墳・円墳などがつくられるようになる。7世紀後半から8世紀前半にかけては、伊豆長岡地区や大仁地区では、崖面に横穴を掘った横穴墓群が^{よこあなぼ}つくられる。

律令時代^{りつりょう}に入ると、天武9年(680)に駿河国から伊豆国が分置され、大宝令公布^{たいほうりょう}(701年)の頃、田方^{たがた}、那賀^{な かつ}、賀茂^{か も}の3郡が分かれ、伊豆の国市は田方郡に含まれた。また、仏教が東国にも普及し、宗光寺^{そうこうじ}が建立され、伊豆国分寺の瓦が市内の瓦窯^{かわらかま}で生産された。奈良時代前半^{じん き}の神亀元年(724)には安房国等とともに伊豆国は遠島の地となり、政争の敗者たちが流人として伊豆国に送られている。

また、伊豆国の国府が三島に置かれると、国府と伊豆国の南地域を結ぶ街道が整備される。伊豆国内の租庸調^{そいうちょう}は、街道または狩野川^{かのがわ}を通じて国府に集められ、さらに西の都に運ばれた。

古墳時代中期には、中央政権との関係を物語る豊富な副葬品が出土した多田大塚古墳群^{た だ おおつか}(菰山多田)や発掘調査により洞穴を埋葬施設としたことが確認された笠石山遺跡^{かさいしやま}(神島)、市唯一の前方後円墳がある駒形古墳等特徴的な古墳が所在している。さらに古墳時代後期から終末期にかけては、平石古墳群^{ひらいし}、富士見夫婦塚古墳^{ふじ みめおとづか}、横山段古墳^{よこやまだん}等、大仁地区を中心に小規模な群集墳がみられる。



北江間横穴群

また、伊豆長岡区域に見られる横穴墓では、火葬骨を埋葬した石櫃^{いしびつ}が発見されている。

三島市に所在していた伊豆国分寺の瓦を生産した花坂古窯址群は、都城で発見されている特殊な形態の壺の生産をおこなったことでも知られている。

田京^{ひろせ}の広瀬神社は、平安時代の「延喜式神名帳^{えんぎしきしんめいちょう}」に見られる古社で、三島神の後神といわれる三島溝織姫命^{みしまぞういひめのみこと}を祀る、神階帳従一位広瀬の明神といわれた。また、同時期の集落は市内各所で見つかっている。



白石の石櫃



駒形古墳出土人物埴輪

武士の世のはじまり、中世関東動乱の要の地 〈鎌倉・南北朝・室町時代〉

ア 鎌倉時代

①鎌倉幕府草創の地

治承 4 年(1180)、源頼朝の挙兵から鎌倉幕府創立が契機となって、日本の中世、いわゆる武士の世がはじまったといわれる。頼朝の挙兵の地は、伊豆の国市であった。

永暦元年(1160)、平治の乱に敗れた源義朝の子の源頼朝は菰山地区の蛭ヶ島に配流され、この地の豪族北条時政の娘、政子と結ばれた。後に尼将軍と称され、日本史上に名を残す女性となる政子と頼朝の結婚が、菰山地区を中世史の幕開けの表舞台に登場させることになる。

治承 4 年(1180) 8 月、頼朝は以仁王の令旨を奉じて挙兵し、平家方の山木兼隆の館に夜襲をかけ、兼隆を討ち果たした。その後、石橋山の敗戦などはあったが、東国の源氏ゆかりの武将たちの支援を得て、鎌倉幕府を樹立した。

頼朝亡き後は、頼朝の嫡子、頼朝が 2 代、3 代将軍に擁立されるが、いずれも暗殺された。尼将軍政子と弟の義時は、京の摂関家から幼い将軍を迎え、幕府の権力は鎌倉北条氏が握った。その後、承久の乱(承久 3 年(1221))を経て、鎌倉北条氏の権力は絶大なものとなり、数代に渡って他の有力御家人を排除しつつ、執権として幕府の中枢を掌握した。それとともに鎌倉北条氏の本拠地である守山地域(寺家・中条・四日町)は大いに栄え、その結果、北条氏邸跡(円成寺跡)や願成就院跡など、北条氏ゆかりの遺跡が多く残ることとなった。

②鎌倉時代の遺跡と関連文化財

狩野川と下田街道に挟まれた北条氏邸跡から出土する、中国大陸や東海地域西部でつくられた陶磁器は、太平洋から狩野川を経て、館にもたらされたと考えられている。さらに、鎌倉の寺院造営の用材として、伊豆の木材が運ばれたことも文献に残っている。木材は天城山中から切り出され、狩野川を通じて沼津に運ばれたとされる。

鎌倉北条氏の館跡である北条氏邸跡(円成寺跡)(国指定史跡)は、守山地域北側に展開し、平成 4 年(1992)からつづく発掘調査によって、規則的に並ぶ建物跡や中国陶磁器、大量のかわらけなどが出土し、平安時代末から鎌倉時代の武士の館跡が明らかになった。北条氏邸跡の遺構と重なるように、願成就院の遺構が発見されている。発掘調査では堂や池がみつ

かっており、仏具などの出土品も多数発見された。

鎌倉北条氏の氏寺である願成就院(国指定史跡)は、吾妻鏡によれば、文治 5 年(1189)源頼朝の奥州藤原氏攻めの戦勝を祈願して建立されたと記されている。木造阿弥陀如来坐像



願成就院 山門

他、運慶制作による仏像5体（国宝）が伝わっている。仏像の胎内からは銘札が発見され、
 文治2年（1186）、北条時政の発願により運慶が製作したことが書かれている。造立年代は
 吾妻鏡の記事と銘札で食い違いが生じており諸説あるが、いずれにしても鎌倉北条氏の氏寺
 として建立され発展していった寺であることは明らかである。発掘調査も行われており、堂
 の一部や屋根に葺かれた多数の瓦がみつまっている。

この他、守山地域には中世から続く寺院が多い。頼朝邸跡と伝えられる光照寺、武田信光
 の伝承をもつ信光寺など、中世史と深い関わりをもつ。また、石塔も多く残されており、
 眞珠院の中世在銘石造物群（市指定文化財）のうち、定仙大和尚塔と呼ばれる五輪塔には
 「正安4年（1302）」の銘が刻まれている。この紀年銘は静岡県内の五輪塔に刻まれたもの
 では最も古い銘である。

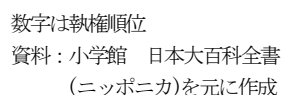
山木兼隆館跡推定地や源頼朝の配流地である蛭ヶ島比定地は、韮山地区に含まれる。蛭ヶ
 島には、寛政2年（1790）、秋山富南の撰文により建立された蛭ヶ島碑記（市指定文化財）が建
 てられている。

江間地域（南江間、北江間）には、江間小四郎と呼ばれた北条義時の館があったとされる。
 周辺の北條寺には北条義時の墓（市指定文化財）が残されている。また、北條寺には、鎌倉
 時代初頭頃に製作された阿弥陀如来坐像（県指定文化財）や室町時代に宋風様式を取り入れ
 た観音菩薩像（県指定文化財）などもある。さらに、牡丹鳥獣文緞帳（県指定文化財）
 は北条政子の寄進と伝えられる。

伊豆長岡地区の天野は、源頼朝の挙兵に従った天野遠景をはじめとする御家人天野氏の本
 拠地である。遠景は、頼朝から最も信頼されていた家臣のひとりで、後に鎌倉幕府が九州の
 御家人を統制するために設置した鎮西奉行に任ぜられる。天野には、天野遠景の墓（市指定
 文化財）とされる石造物が残されている。

伊豆長岡地区の寺には、平安時代～鎌倉時代の歴史に関わる伝承が多く残る。西琳寺には、
 以仁王とともに京で反平氏の兵をあげた源頼政の妻である菖蒲御前の宅跡（市指定文化財）、
 最明寺には5代執権北条時頼の墓（市指定文化財）と伝えられる石塔がある。宗徳寺の卷子
 本「紺紙金字法華経」十卷（県指定文化財）には、建治2年（1276）の年号が記されてい
 る。

古奈温泉は、鎌倉～室町時代から知られた温泉であり、吾妻鏡には嘉禎2年（1236）、4
 代将軍藤原頼経が小名（古奈）温泉へ行く計画があったこと、仁治元年（1240）、幕府の医
 者である丹波朝臣良基が小名温泉で死去したことなどが記されている。



图资-1 北条氏略系图

①円成寺と堀越御所

北条氏邸跡（円成寺跡）

室町時代の長禄2年（1458）、京の將軍足利義政の兄、足利政知が新たな鎌倉公方として下向してきた。しかし、うち続く東国の動乱のため、鎌倉入りを果たせず、^{あしかがまさとも} 葺山堀越の地に^{ちやうろく}

「堀越御所」を構え（堀越御所跡）、堀越公方と称した。政知は延徳3年（1491）に没し、その子茶々丸が跡を継ぐが内訌が相次ぎ、伊豆国は内乱状態に陥った。明応2年（1493）、伊勢宗瑞（北条早雲）が伊豆に侵攻し、堀越御所を襲撃して茶々丸を滅ぼし、伊豆国を平定した。この堀越御所の跡は「伝堀越御所跡」として国の史跡に指定されている。

②国清寺と毘沙門堂

東部山間地域の奈古谷の中心に位置する国清寺は、南北朝以降伊豆国守護となった関東管領山内上杉氏が、無礙妙謙を開山に迎えて暦応年間（1338～1342）に創建した氏寺である。境内には創建に関わる「妙謙」の名を記した貞和4年（1348）銘の宝篋印塔をはじめ、14～15世紀の石塔が残されている（「開山塔」・「開基塔」など）。国清寺周辺は、上杉氏の伊豆における最大の拠点であり、守護所に準じる場所であった。そのため、上杉禪秀の乱や永享の乱の折など、鎌倉における政争の歴史の舞台のひとつともなっている。また、堀越公方足利政知が一時拠点としたこともあった。

国清寺周辺には国清寺本堂の木造釈迦如来像（市指定文化財）、毘沙門堂門の木造金剛力士像（県指定文化財）、観音堂十王像（市指定文化財）など、重要な美術工芸品が存在する。

また、国清寺から毘沙門堂に向かう道筋には、地藏像や種字を刻んだ磨崖仏（市指定文化財）が多く存在する。至徳2年（1385）銘の弘法石、明徳2年（1391）の大日石など、年号が刻まれているものもあり、歴史的価値も高い。石塔類も多く、市内では守山周辺に次いで集中して分布する。かつて国清寺の子院であった徳隣院・松月院、観音堂境内、慈光院の他、道沿いや個人宅に祀られている例も見られる。

③南北朝・室町時代の関連文化財

南北朝の康安元年（1361）、鎌倉公方足利基氏に背いた畠山国清は神島にある神益城（金山城）、三戸城（三津城）、立野城（修善寺城）に立て籠もり鎌倉軍と戦った。神益城の場所については、城山（標高342m）とする説と、棒石山（標高121m）とする説があり特定されていない。また、龍源院の一角には脇屋義治を祖とする脇田家一族の墓所がある。脇屋義治は南北朝期に活躍した新田義貞の甥である。

田京にある蔵春院はかつて修禅寺・最勝院とともに伊豆の三名刹といわれた。永享11年（1439）、主君足利持氏を死に追いやった関東管領上杉憲実は、持氏追悼の寺として蔵春院を建立した。

金谷の本立寺には、円成尼が鎌倉東慶寺に寄進した梵鐘（県指定文化財）が残されている。

戦国時代の幕開けから天下統一布石の地へ 〈戦国・安土桃山時代〉

伊豆国を平定した伊勢宗瑞（北条早雲）は菰山城を整備し、同城を本拠とした。その後、相模国西郡を支配する大森氏から小田原城を奪い、こののち関東一円を支配する小田原北条氏 5 代 100 年間にわたる関東統治の基礎を築いた。2 代氏綱は本拠地を小田原城に移すが、菰山城はその後も伊豆支配のための支城として存続し、対今川、武田の最前線の拠点として重要視された。

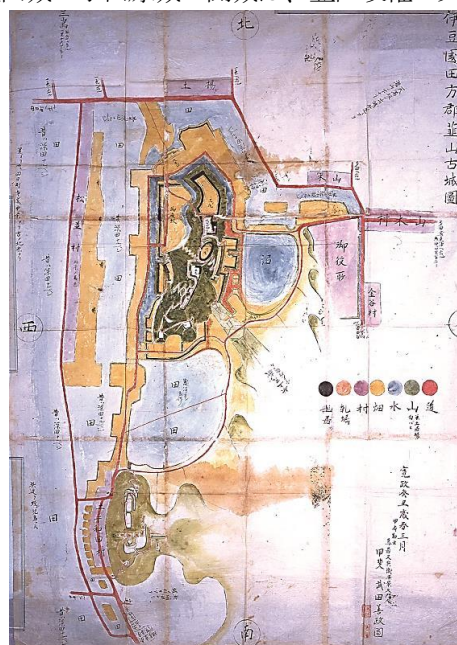
天正 18 年（1590）、四国・九州を平定した豊臣秀吉は、天下統一の最後の仕上げとして、小田原攻めを実行する。小田原攻めに際して、菰山城は山中城・足柄城とともに、防備を固めるが、徳川家康の勧告により開城した。小田原北条氏の敗北による菰山城・小田原城の開城は、豊臣政権の天下統一の布石となり、関東の戦国時代は終焉を迎えた。

小田原北条氏滅亡後、伊豆は徳川家康の領国となり、家臣であり家康の異母弟ともされる内藤信成が菰山城に入り、検地を実施するなど荒廃した伊豆の復興に努めた。関ヶ原合戦後の慶長 6 年（1601）、内藤信成は駿河に転封し、菰山城は廃城となった。

菰山城築城とともに、戦国時代の伊豆の国市の中心は、菰山城地域に移る。菰山城の外縁地域として、奈古谷・菰山多田、守山地域の旧下田街道付近などに関連文化財が分布する。

菰山城跡は、本城とそれらを取り囲む丘陵地帯を含む 94 万㎡の広大な城郭である。本城や丘陵には、土塁や堀など当時の遺構が良好に残っている。低地部分では、発掘調査が行われており、堀や屋敷地、道路、庭園跡などが見つかっている。東側の丘陵部には、豊臣軍が築いた付城跡が残っている。現在、太閤陣場付城跡、本立寺付城跡、追越山付城跡、上山田付城跡、昌溪院付城跡、木戸稲荷付城跡の 6 つの付城跡が埋蔵文化財包蔵地になっている。菰山城跡と付城群をあわせて、天正 18 年（1590）の攻防が遺跡として残っている点が重要である。

本立寺は、永正 3 年（1506）江川家 24 代英盛が邸内にあった大乘庵を移して建立された。境内に 16 世紀代の石塔残欠が残っている。香山寺は、山木判官平兼隆開基の寺といわれているが明らかではない。境内に六地藏石幢や石塔残欠が残っており、伊勢宗瑞（北条早雲）が再興したという伝承もある。また、菰山城東側の菰山金谷、菰山山木の集落は、古いたずまいを残しており、菰山城の内宿（城



伊豆国田方郡菰山古城図
(公財) 江川文庫蔵



図資-2 近世の下田街道

下町)であった可能性が指摘されている。

戦国時代になって国清寺は前代よりも衰えたが、寺が抱えていた職人集団はこの地に残った。小田原北条氏はこれらの職人を城の整備や経営を支える集団として組織したことが文献史料から知られている。

下田街道は戦国時代においても交通・流通の動脈であった。四日町には市があり、小田原北条氏の蔵が建てられていた。四日町の市は、傀儡(人形つかい)も集まるような賑わいのある市であり、元亀元年(1570)に武田氏が葦山城を攻めた時には、市周辺に火をかけられている。天正18年(1590)の豊臣軍の葦山城攻めの折には、願成就院などの寺院や村々に狼藉を防ぐための制札が出された。

幕府直轄の代官支配地 〈江戸時代〉

近世を通じて葦山代官を世襲した江川家の先祖、江川英長^{えがわひでなが}は天正18年(1590)豊臣秀吉による小田原北条攻めの際、徳川家康の旗本として葦山城攻めに加わった。そのことにより、徳川家康の関東入部後は、旧領5千石余を支配する代官として存続した。また江川家は、戦国・江戸初期を代表する銘酒「江川酒」の酒造家としても活動していた。

江川家の屋敷である「江川家住宅(国指定文化財)」は、およそ400年前(17世紀頃)に建てられたと推定されている主屋をはじめ、書院・仏間・門・土蔵などが国の重要文化財に指定されている。また、江川家住宅の敷地を含む一帯は、江戸時代から明治時代中頃まで、地方行政における中心的な役割を果たした場所として、葦山役所跡(国指定史跡)となっている。

元禄期(1688~1704)には、江川家は三島代官と並立する吏僚^{りりょう}的代官(葦山代官)となり、宝暦8年(1758)の三島代官廃止後は伊豆・駿河・武蔵・相模の天領を支配する葦山代官職を世襲して幕末を迎える。

幕末期に活躍した江川太郎左衛門英龍^{えがわたろうざ えもんひでたつ たんなん}(坦庵)は、葦山代官として管轄地の民政に尽力したほか、幕府海防政策の担当者として、多くの業績を残した。天保6年(1835)葦山代官になった英龍は、渡辺^{わたなべ}崋山や高島^{たかしま}秋帆に師事し、蘭学や西洋砲術を積極的に取り入れ、その普及に努めた。安政元年(1854)の安政大地震により大損傷を受けたロシア軍艦ディアナ号乗組員の救出にあたりとともに、代船として、伊豆戸田で建造された日本初の洋式帆船(ヘダ号)建造についても大きな役割を果たした。さらに、軍隊の兵糧としてパンを製作したことから、今日「パン祖」としても知られている。また、英龍の代表的な業績として知られているのが、葦山反射炉と品川台場の築造である。葦山反射炉は、品川台場に配備する鉄製砲の鑄造を目的に造



江川家住宅 書院



江川家南米蔵・北米蔵

られた金属溶解炉で、嘉永6年(1853)のペリー艦隊来航を受けて、幕府により築造が決定され、安政元年(1854)6月に起工。安政4年(1857)11月に竣工し、鉄製カノン砲や青銅製野戦砲の鑄造が行われた。江川家に伝わる古文書等は、^{かのがわ} 葦山代官江川家関係資料として重要文化財に指定されている。

市域の中央を流れる狩野川は古くから水運に利用されてきたが、江戸時代中頃に葦山地区から河口部の沼津にいたる舟運が開設され、大型の川船が運航されるようになり、年貢米のほか多くの物資が行き交うようになった。また、狩野川は上流部天城山麓で伐り出される材木の搬送ルートとしても使われた。

陸上交通では、江戸時代、東海道三島宿、三島大社を起点に下田に至る下田往還が通っていたが、途中、天城山が半島を南北に分断していたため整備が遅れ、往来が盛んになるのは江戸時代中期以降のこととされる。幕末、ペリーが来航し下田港が開港されるに至り、東海道と下田を結ぶ下田街道の重要性がさらに増すこととなった。



葦山反射炉

近代産業への飛躍の地 〈幕末・明治・大正・昭和時代〉

ア 幕末・明治（新たな時代へ）

明治維新にあたり、^{ひでたけ} 葦山代官江川英武はいち早く新政府に帰順し、旧支配地の行政機構はそのままだに、旧伊豆国・旧武蔵国 17 万石を管轄する葦山県（初代知事：江川英武）が誕生した。

明治4年（1871）末の廃藩置県によって葦山県は解体され、相模国西半・伊豆国を合わせて足柄県に再編成された。初代県令には、^{かしわざただとし} 江川英龍の部下であった柏木忠俊（葦山代官手代出身）が任命されている。柏木は明治初期に産業や教育などの様々な面で開明的政策を実施した人物として、また、静岡県立葦山高等学校の基礎を作った人物としても著名である。

明治9年（1876）、伊豆国は静岡県に編入され、足柄県は廃止となった。その後、明治22年（1889）の市制・町村制施行により、現伊豆の国市域の村々は川西村（旧伊豆長岡町）、田中村（旧大仁町）、葦山村（旧葦山町）となり、今日に続く行政単位としてのまとまりが成立した。

明治32年（1899）には三島・田中村間に^{ずそう} 豆相（駿豆）鉄道が完成し、終着駅の大仁駅は、そこから馬車で修善寺・天城・中伊豆方面に向かう人々で賑わった。また木炭や蚕糸など物流の集積場としても栄え、大仁駅周辺には警察署や裁判所、病院などが作られた。

また「湯出づ国」が伊豆の語源になったという説があるほど温泉の多い伊豆半島でも、中世から続く^{こな} 古奈温泉は、明治24年（1888）の全国温泉番付東前頭10枚目に位置づけられ、修善寺、熱海に次ぐ知名度があった。

長岡温泉も明治40年（1907）に発見され、古奈温泉とともに、伊豆長岡温泉として、伊豆を代表する温泉場となっている。

明治後期に至り、江川英武の女婿山田三良(帝国学士院長)を中心として葦山反射炉保勝会が設立され、葦山反射炉の保存運動が展開され、それを受けて、明治41年(1908)に陸軍省による保存修理が行われ、保存への道が開けた。

イ 大正（産業の発展）

大正13年(1924)駿豆鉄道は修善寺駅まで延長されたが、大仁町には間宮堂(後の東芝テック大仁事業所)や、東洋醸造(後の旭化成ファーマ)など、戦前戦後を通じて大規模な事業所が立地し、工業の盛んな地域として発展した。

大正5年(1916)葦山村名勝旧跡保存会が設立され、葦山地区の名勝・史跡への顕彰活動を企画し、今日の文化財保護活動に至っている。

陸軍省により保存修理が行われた葦山反射炉は、大正11年(1922)3月8日に国の史跡に指定され、以後数回の大規模な保存修理を経て、現在に至っている。

ウ 昭和（災害・戦争・復興）

近現代における大規模な災害としては、昭和5年(1930)の北伊豆地震、昭和33年(1958)の狩野川台風があげられる。北伊豆地震では、伊豆の国市が立地する田方平野に、死者255人を数える甚大な被害をもたらしたこの時の地震の揺れが魚雷の表面に記録されたものが、「地震動の擦痕(国指定天然記念物)」である。

昭和10年代に入り、日本が日中戦争、太平洋戦争へと突き進む中、当市域でも戦時体制が取られ、市民にも多くの戦争犠牲者がでた。

昭和20年(1945)の敗戦から、戦後復興、高度成長時代にかけて、伊豆長岡町は温泉を中心とした観光業、大仁町は東洋醸造や東芝テックに代表される工業、葦山町は米作やいちごのハウス栽培などの農業というように、それぞれ特徴ある発展を遂げてきた。

昭和33年(1958)の狩野川台風においては、豪雨と狩野川の堤防決壊により、死者・行方不明者1269人という記録的な被害を出した。



地震動の擦痕

エ 平成（平成の合併）

平成4年(1992)頃からのバブル景気の後退を受けて、各町とも税収が減少し、近隣市町との合併を模索することとなった。平成15年(2003)10月、三町による合併協議会が設置され、この合併協議会での協議を経て、平成17年(2005)4月、伊豆長岡町、大仁町、葦山町が合併し、「伊豆の国市」が誕生した。

平成27年(2015)7月、日本における近代的な製鉄技術導入の黎明期を象徴するものとして、葦山反射炉が「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」の構成資産として、世界文化遺産に登録された。